

優秀賞

『パチンコ 真に人々に受け入れられるために』

園田 恒 様

横浜国立大学 教育人間科学部学校教育課程3年

目次

はじめに

- 第1章 現在のパチンコが抱える問題点―「遊技」
 - 第一項 ― 「遊技」「ギャンブル」の乖離
 - 第二項 ― コミュニティからの浮遊…「遊技へのネガティブイメージ」

- 第2章 問題点をどう乗り越えるか ― 「各種データから方針を考える」

- おわりに これからのパチンコ ― 「パチンコが秘める成長の可能性」

はじめに

「パチンコ」、その言葉に人々は一体どのようなイメージを抱くのだろうか。

私はパチンコに対して、必ずしも良いイメージを持つことが出来なかった。

個人的に自分が、パチンコという存在を意識し始めたのは、自分が長崎県に引越をした 10 年程前のことだ。一時間に数本列車が停まるような小さな駅舎のすぐ隣、駅舎の数十倍はあろうかという大きな店舗と、周辺の雰囲気似つかわぬ派手なネオン、自分にとってのパチンコは、簡素な田舎町に浮遊する異質な存在だった。

そのイメージが忘れられずに、パチンコに興味を持ち、その過程でパチンコ店でのアルバイトに従事するに至った。また、ホール運営企業など、パチンコ関連会社のインターンシップにも足を運んだ。生計を立てる仕事として、なぜ「パチンコ」という道を選んだのか、疑問が尽きなかったからだ。

情報収集をして感じたことは、**パチンコ業界の内部と外部で、「パチンコ」のイメージに相当の乖離がある**ことだった。

現代、多くのパチンコを生業としている企業は、自らが提供するサービスを「**レジャー**」「**遊技**」と定義している。

多くのホール運営企業では、インターンシップで業界を説明する際、いかにレジャー産業の規模が大きく、その中でパチンコなどのアミューズメント業界が重要な地位を占めているのかを力説する。パチンコという業界の巨大さをアピールできると考えているのだろう。

しかしながら、自分はこの説明を聞きながら、素直に首を縦に振ることが出来なかった。

細かくは後述するが、世間はパチンコを「**ギャンブル**」であるとする認識がいまだに根強いからだ。

パチンコに対する風当たりが強い今、自分は様々な場所で出会った、パチンコを仕事にする人のために「パチンコが真に社会に受け入れられる為、何をすればよいか」をテーマに掲げ、この論文を執筆することを決めた。

このエッセイが、パチンコ業界にとって少しでも気づきとなれば幸甚である。

第1章 現在のパチンコが抱える問題点

・第1項「遊技」「ギャンブル」の乖離

パチンコ業界の多くの企業が「レジャー」「遊技」と定義するパチンコだが、まずその定義について、ここから検証していきたい。

現在、パチンコ店は、風俗営業等の規制及び業務の適正化などに関する法律（風営法）の第二条第一項第七号（通称 第七号）に基づいて営業させている。

この法律に則ると、パチンコはあくまでも遊技であり、賭博（ギャンブル）に当たるものではなく、よって刑法 185 条・賭博罪による摘発も行われない。

しかしながら、社会の目はパチンコを「事実上の賭博」とみなしている場合が非常に多い。

（抜粋 1）2014 年 9 月、厚生労働省の研究班が発表したギャンブル依存症が疑われる成人の統計値は、男性 438 万人、女性 98 万人の計 536 万人、この数は男性の 8.7%、女性の 1.8%、全人口の 4.8%に達する。このパーセンテージは諸外国と比べても一様に高い数値と見られると報じられた。

もともと、（抜粋 2）この調査の質問票は米国でカジノに通う人を想定して作られており、パチンコ店に気軽に立ち寄れる日本では、実態以上に疑い例が増えてしまうという問題点も指摘されており、単純に、日本は重度のギャンブル依存症で苦しんでいる人が多いということを示しているわけではない。しかしここからわかることは、公共の報道機関である新聞などが、詳しくは後述するパチンコの三店方式などの側面を分析して、パチンコをギャンブルと定義していることだ。

なぜパチンコの定義が、「遊技」と「ギャンブル」で乖離が発生してしまうのか、そこにはパチンコの性質が深く関係している。パチンコではプレーを通じて、開始時に借りた玉の何倍、何十倍もの出玉を得ることが可能であり、そこで得られた出玉は、カウンターで特殊景品に交換することができる。その特殊景品を店舗近くの交換所に持っていけば決まった額で買取りがなされる。「三店方式」と呼ばれるこの方法は、出玉の事実上の換金が成立させていると指摘されているのだ。

さらにパチンコに対して過度の金銭をかけて、その何倍もの金銭を手に入れようとする、いわゆる射幸心をあおる行動、その射幸心に内在するパチンコの依存性は、パチンコの魅力の一つであり、同時に目の前に立ちはだかる大きな問題となっている。

パチンコは「遊技」か「ギャンブル」か、このあいまいな定義づけは、ギャンブルをよしとしない人にとって、ギャンブル全般、そしてパチンコを批判するためには非常に都合のいいものになっている。

（抜粋 3）日本共産党の発行する日刊機関誌「しんぶん赤旗」は、ギャンブル依存症が疑われる成人の統計値が、諸外国と比較して高いことを取り上げ、その背景に競馬、競輪などの公

営ギャンブルに合わせ、パチンコ、パチスロなどの世界に例のない日常化した「賭博」があるとしている。

自分はこのような理由で、パチンコが非合法であるという立場は取らないが、この現実が、パチンコの内部と外部でイメージの乖離を生み、その乖離が問題の呼び水となっている。

最近には、(抜粋4) 2,014年の10月、国政政党である次世代の党は、特殊景品を通じての換金も、パチンコの出玉の換金として禁止する記述を入れた、風営改正法の検討に入ると報道で伝えられた。

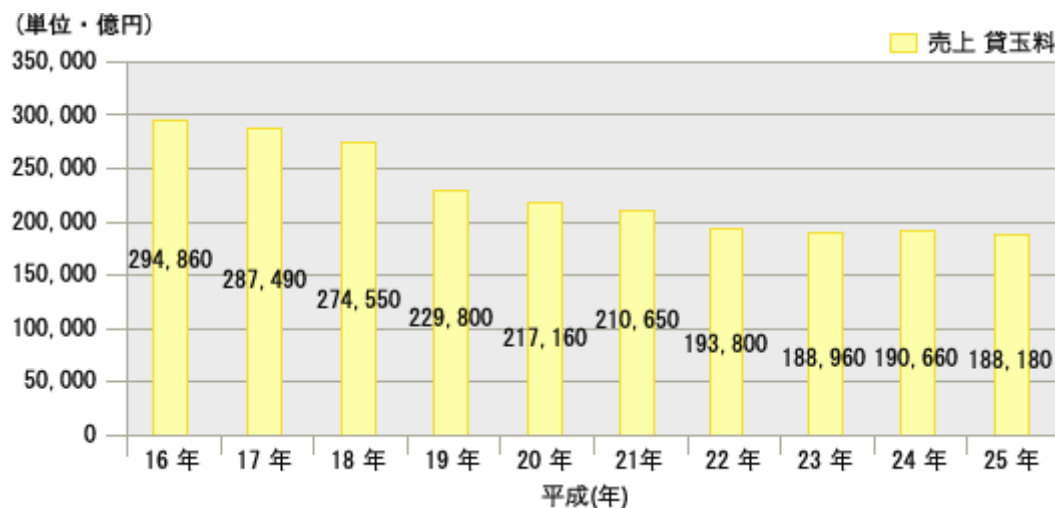
(抜粋5) 現在、パチンコ店の賞球が一般の景品に交換される確率が1パーセントに満たないこの業界にとって、特殊景品への交換の禁止は致命傷になりかねない。

結局この風営改正法は、同年12月の総選挙において、次世代の党が大幅に退潮したこともあり、現時点での法制化は極めて難しいものになったが、この議論は、このままでは将来、業界全体の存続があやぶまれる事態が訪れる可能性がある。

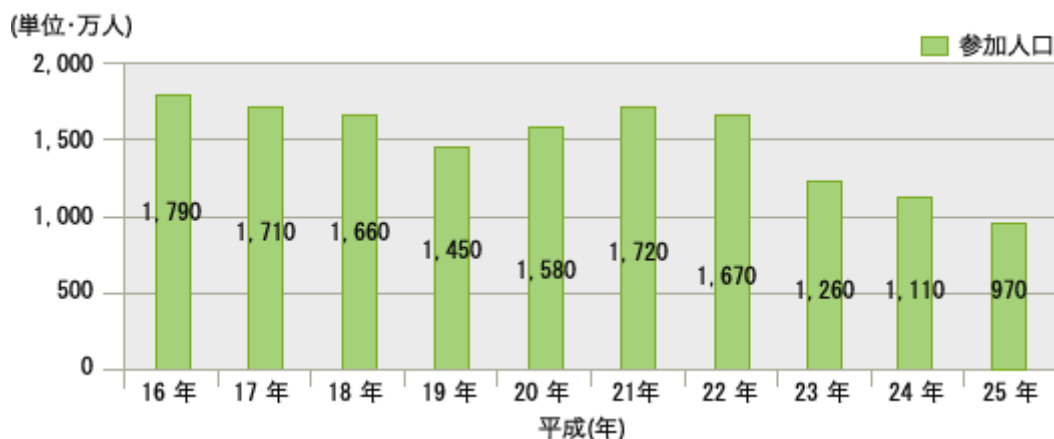
続いては、この制度的乖離が引き起こした問題を見ていきたい。

・第2項 コミュニティからの浮遊 「パチンコ遊技へのネガティブイメージ」

近年、パチンコホールでは長時間の使用も可能な休憩所の導入や、高性能の空気清浄器の導入などで、人が余暇を安らぐ『リラクゼーション空間』としてのインフラ整備が進んでいる。しかしながらここ10年、パチンコホールの売上、参加人口ともに減少の傾向が強い。



(抜粋6) パチンコホールの売上高



(抜粋7) パチンコホールの参加人口

このデータから、現在のパチンコホールの設備投資が、新規顧客を増やし、遊技人口を増加させるに至っていないと推測される。

では、現在パチンコを経験していない人は、なぜパチンコをやらないのだろうか。

(抜粋8) インターネット調査会社「マイボイスコム」の調査によると、パチンコ未経験者のパチンコをやらない理由として、「時間やお金の無駄だと思う」が47.7%、「興味がない」が43.3%と高く、現在パチンコ店が取り組んでいる環境の改善とは結びつかない理由が多いの

だ。

現在、多くのパチンコ店で取り組まれている、空調設備や休憩所の充実などは、一部の未経験者や現在のパチンコユーザーに対しては効果的であるかもしれないが、過半数のパチンコ未経験者に対しては、やらない理由を払拭し、遊技の動機づけとはなっていない。

私はこの現状を、「パチンコのコミュニティからの浮遊」と名付けたい。

騒音、タバコ、さらには射幸心をあおり、依存症の問題も懸念されている営業など様々な問題をパチンコは抱えており、その問題の多くは人々の知るところとなっている。しかしながら、現在パチンコが一般の社会に向けてどのような情報を発信しているだろうか。

パチンコ店が配布するティッシュは新台入替の情報がほとんどで、看板には機種と店の宣伝で埋め尽くされ、CM では台の楽しさ、店舗の居心地など、パチンコへの明るいイメージを作ろうとしているものばかりだ。

もちろん、企業の公式ホームページなどを見れば、ネガティブな問題に対する説明をしているものもあるのだが、そもそもパチンコに対してネガティブイメージを持っている人は、公式サイトを閲覧するどころか、パチンコに関わる情報を積極的に手に入れようとはしないだろう。

パチンコに馴染みのないまま、そのネガティブなイメージを知ってしまった大多数の人にとって、ただただ CM などでの明るいイメージを発信するだけでは、ポジティブなイメージを付けるどころか、社会からの反感を買い、逆効果となってしまう恐れがある。

このように、社会の考え方と、パチンコの業界の考え方のギャップが、人々とパチンコとの間に大きな壁を作り、結果的に先述の「パチンコのコミュニティからの浮遊」という現象を作り出してしまった。

パチンコ遊技を公にすることへの抵抗、パチンコという職業全般への蔑視、差別。「パチンコなんてなければいいのに。」そんな声が多く聞かれるようになってしまった。

(抜粋9) 2014年1月、大阪府遊技業組合連合会が、パチンコ・パチスロを遊技しない、全国の20代～80代の人々を対象に実施したパチンコ、パチスロ店に対する意識調査では、実に50.7%もの人々が、「パチンコ・パチスロ店はどちらかといえば無いほうがいい」と答えるに至った。

競馬・競輪・競艇など、他の公営ギャンブルに対して、同様の回答をした割合が、34.3%にとどまっていることから、これこそパチンコが、多くの人々の心から遊離していることへの証左ではないだろうか。

この現状を打破し、そしてパチンコを多くの人々が参加するものとして、業界の成長をどう維持していくか。その方法について考えていきたい。

第2章 問題点をどう乗り越えるか — 「各種データから方針を考える」

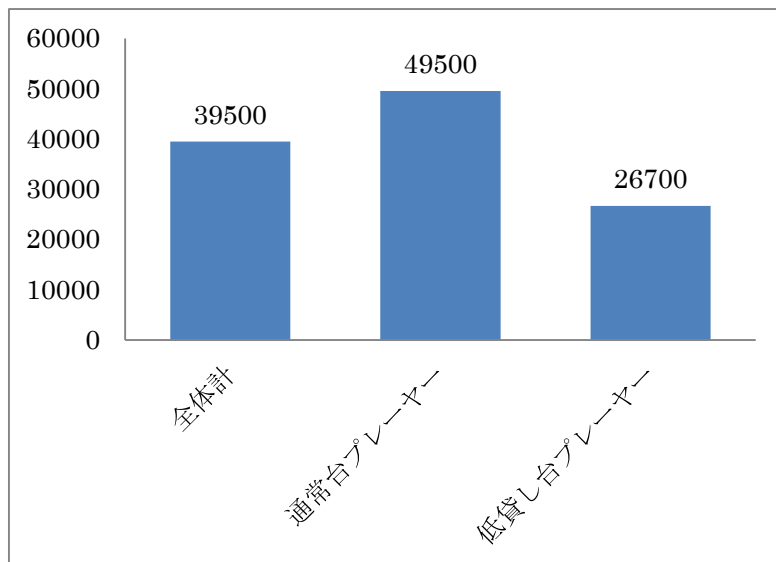
先程の章では、パチンコというビジネスの「ギャンブル」と「遊技」の乖離、そして「パチンコ」とコミュニティからの浮遊という問題にスポットを当てて考えてきた。

この2点を改善するためには、どのような策をとればよいのか、考察していきたい。

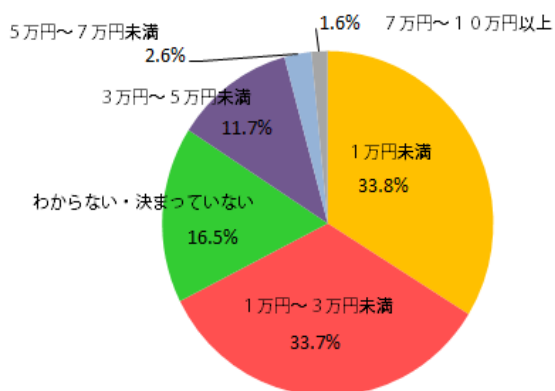
まず「パチンコ」の持つ「ギャンブル性」に、どのような方法で対応すべきかであるが、自分は「消費者のニーズに合わせたベストミックス」が重要であると考えている。

なぜベストミックスが求められるのか、(抜粋 10) ホール来店者を中心に行ったアンケートのデータと、(抜粋 11) パチンコ遊技・非遊技者を問わずに行われた、余暇の過ごし方に関するアンケートのデータを比較してみていきたい。

・一か月のパチンコ・スロットの平均プレー予算（通常台・低貸し台で分類）



・一か月あたり、余暇に使う予算はいくらぐらいですか？（回答数：43,271人）



上記の表から読み取れるように、パチンコ・スロットの一か月あたりの平均遊技資金は、

低貸玉台のユーザーとしても月に**2万円強**、主流である4円パチンコなどの通常台では**月5万円に迫る勢**いだ。その理由として、当たりの確率が低く、その分当たり時の出玉が多いなど、いわゆる射幸性の高いパチンコ台の普及や、遊技によって消費する金額のスピードの速い台の定着が、遊技予算の高騰を招いている。

しかしながら、パチンコの遊技、非遊技に関わらず集められた母集団へのアンケートで、余暇に使う予算の金額を調査すると、**全体の三分の一に当たる人々は1万円以下**、**またほぼ同じ割合で1万円～3万円**という結果になっている。

さらに、この金額はパチンコ関係のみならず、余暇全体に使う予算であるため、もしこの金額内で遊技をする場合、パチンコに使うことが出来る金額はさらに少なくなることが予想される。

現在のパチンコの経営システムは、果たして月の余暇に使う予算が3万円以下という、人口の**3分の2**を取り込むことは可能であろうか。余暇に充てる費用の大幅な増大が期待できるような好景気、ならびに絶大な人気を得るパチンコ台が生まれにくい限り、定期的なパチンコユーザーにはならず、もしパチンコを好きになったとしても、いわゆる、にわかユーザーにしかなりえないのではないだろうか。

そこで提案したいのが「**パチンコのベストミックスの確立**」である。

現在、4円パチンコなどの通常台が多くを占めている状態だが、ひと月に余暇に使える金額が1万円以下の人々の場合、低貸玉営業台での遊技であっても、その負担は決して軽いものではない。消費者に、比較的高額な負担を求めるのではなく、低負担でもパチンコの楽しみが享受できるようなパチンコ店の営業モデルの確立が求められる。

余暇に使える金額が、多い人も少ない人も楽しめるような、多種、多レートの手、営業形式のミックス、そして多くの人に楽しんでもらえるような、通常台と低貸玉台のバランス、そのバランスを支え得る、台のコスト、人件費のコストの見直しに至るまで、もう一度ビジネスの形から練り直すこと、それこそが、現代のアミューズメントを担う業界としての責務であると確信している。

その実行が、パチンコを「高価なアミューズメント」と感じ、離れていた人との距離を縮め、コミュニティから浮遊してしまったパチンコを、人々の大衆娯楽として、裾野の広いものに変えていく原動力になると考えている。

おわりに これからのパチンコ —「パチンコが秘める成長の可能性」

現在、相次ぐレジャーの多様化や、店舗数、売上高の減少で、俗に「斜陽産業」とも呼ばれているパチンコ産業であるが、少し調べると今後の発展につながる可能性のある希望が見えてくる。

期待した出玉に恵まれないなど、提供するサービスによって必ずしもお客様の欲求を満たすことが出来ないことが、他のサービス業より高い頻度で起こってしまうパチンコ店にとって、店員の接客は、**その後のお客様の来店の是非を左右する、非常に重要な要素である。**

それだけに、お客様の期待に応えられなかった時の接客など、パチンコ店の接客は、他のサービス業を凌駕する、高いレベルのものになりつつある。

パチンコ店のサービス・接客が、他のサービス業のお手本になると認められれば、研修先としてパチンコ店を選ぶ他業種も現れるかもしれない。**高いサービス力、接客力は業界全体の貴重な財産となり得る。**

もちろん、これらの希望を現実のものにするためには、かなりのプロセスを踏まなければならず、その過程は茨の道になるかもしれない。

しかしその道を越えた時、このパチンコ業界は、社会的に新たな地位を占め、真に社会に貢献する日が訪れるのではないだろうか。

その日が訪れ、現在パチンコ業界で奮闘する全ての人々に、更なる幸せが訪れることを、願ってやみません。

抜粋・参考データ元

抜粋 1—河北新報ウェブサイト 2014年9月17日付

社説 ギャンブル依存／病気としての対策が必要だ

http://www.kahoku.co.jp/editorial/20140917_01.html

抜粋 2—読売新聞医療サイト yomiDr. (ヨミドクター) 2014年12月11日付

ころ元気塾 「一生治らない」は間違い…ギャンブル依存症外来

<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=109424>

抜粋 3—しんぶん赤旗 2014年8月22日付

ギャンブル依存症 世界で突出 536万人

http://www.icp.or.jp/akahata/aik14/2014-08-22/2014082214_01_1.html

抜粋 4—日本経済新聞 2014年10月7日付

パチンコ換金禁止へ法改正 次世代の党が検討

http://www.nikkei.com/article/DGXLASF06H1X_W4A001C1PP8000/

抜粋 5—日経ビジネス DIGITAL 2012年11月22日版

ニュースを斬る 前代未聞、「パチンコ店の裏側ツアー」

<http://business.nikkeibp.co.jp/article/NBD/20121121/239696/?ST=pc>

抜粋 6、7—一般財団法人 日本遊技関連事業協会ホームページ

パチンコホールの売上、参加人口、参加日数

<http://www.nichiyukyo.or.jp/gyoukaiDB/m6.php>

(データ元) (財)日本生産性本部発行レジャー白書

抜粋 8— Business Media 誠 2012年3月2日 13時46分更新

パチンコをしなくなった理由は？

<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1203/02/news051.html>

抜粋 9— 週刊アミューズメントジャパン 2014年3月31日発行

大阪府遊連青年部 パチンコ・パチスロノンユーザー意識調査

業界に厳しい見方

<http://amusement-japan.co.jp/wp/wp-content/uploads/2014/03/140331-4271.pdf>

抜粋 10— 日遊協 2013 年ファンアンケート調査

http://www.nichiyukyo.or.jp/gyoukaiDB/data/fun_questionnaire_2013.pdf

抜粋 11—TEPORA ~快適ライフを応援する生活情報リサーチサイト~

2013 年 2 月 13 日掲載

【アンケート】余暇の過ごし方について

http://www.tepore.com/user/research/enquete/result/res_0208.html